

アメリカ軍のドイツ占領開始と民衆 : アー
ヘン : 1944年秋

ABE, Masaaki / 阿部, 正昭

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei University Economic Review / 経済志林

(巻 / Volume)

66

(号 / Number)

2

(開始ページ / Start Page)

113

(終了ページ / End Page)

142

(発行年 / Year)

1998-10-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002605>

アメリカ軍のドイツ占領開始と民衆

——アーヘン：1944年秋——

阿 部 正 昭

目 次

1. はじめに
2. 1944年秋のアーヘンをめぐる戦況
3. 米軍包囲下の民衆生活
4. アーヘンにおける占領行政＝軍政の開始

1. はじめに

第二次世界大戦中ヨーロッパの広い地域を占領支配していたナチスドイツは、1943年以後東部戦線でソ連軍の反撃をうけて劣勢に陥り、さらに西部戦線でも44年6月6日のノルマンディ上陸にはじまる英米軍の大攻勢をうけて敗北を重ねた。北フランス・ベルギーなどの主要な占領地域を失って退却を続けたドイツ軍は、44年9月以降西部国境地域での地上戦闘を余儀なくされた。この9月から1945年5月上旬までの数カ月間、ドイツ軍は「最後の兵まで戦え」との総統命令に従って激しい絶望的な抗戦を続けたが、この過程で両軍の兵士だけでなくさらに多くの民衆が戦争の犠牲になり、広い範囲にわたって国土も灰燼に帰した。

45年5月8日、連合国にたいする無条件降伏文書に調印したナチスドイツが滅亡した後、6月5日からドイツに対する連合国による分割占領と占領行政（軍政）が本格的に開始された。この全面的敗北に先立つ大戦末期の数カ月間、連合軍はドイツ軍の抵抗を破ってベルリンを目指し進攻を

続けながら、拡大する占領地域毎に占領直後から占領行政（軍政）を展開しはじめた。

この時期の連合国とくに米軍のドイツ占領政策の大綱は、44年9月のアイゼンハウアーの声明の中にその要点を見いだすことができる。「①連合軍はドイツに勝利者としてきたが抑圧者ではない。その目的はナチズムの根絶である。②最高司令官は占領地域で三権を掌握し、その行使のために軍政府を設立する。その命令にドイツ人は即時無条件に服従すること。軍政に反抗する者・命令に違反する者は軍事法廷で裁かれる。③法廷・学校・教育施設を閉鎖する。④すべての公務員とこれに準ずるものは職場に止まり軍政府の指示に従うこと。」⁽¹⁾

米軍のドイツ占領行政（軍政）は基本的に44年10月21日からアーヘンで始められた。占領直後に進駐してきた占領行政＝軍政担当者は、昨日まで敵地であった占領地域においてどのような現実直面したのであろうか。疲弊し尽くしたドイツ民衆とどのように係わりながら、彼らは連合国の戦争目的の実現に努めたのであろうか。他方で占領地域の民衆はどのように占領という現実を受け入れ、最低生活のなかで彼らの人間らしい生活を軌道にのせていったのであろうか。大戦末期にナチス党と中央政府が「最後の一兵まで」戦うことを軍と国民に強制し続けていたなかで、連合軍は占領地域を拡大しながら地域ごとに軍政を組織し経験を積み重ねていった。この時期の具体的で地域的な軍政の経験が、1945年5月から始まった連合国の本格的占領行政に強い影響と方向性を与えることになった。

筆者はこの論文で米軍が占領したアーヘン市を対象に、1944年秋40日にも及んだアーヘンをめぐる地上戦闘の最中に民衆はどのように生活したのか、それが占領とともにどう変わったのか、占領政策はどのように実施されたのかなどの問題の具体的検討を通して、連合国の本格的なドイツ占領行政の前提条件を明らかにしたいと思う⁽²⁾。

2. 1944年秋のアーヘンをめぐる戦況

歴史的にみてカール大帝の名とともに古いアーヘンは、現在ノルトライン・ウェストファーレン州西部の国境の中都市で、近代史においては対仏戦略と西部国境防衛上の要衝として知られていた。第二次大戦直前約16万人あった人口は、1944年の市民の疎開や産業施設の移転、同年秋に地上戦闘の接近にともなって実施された市民の強制的避難・退去および戦闘の犠牲のために大幅に減少し、占領直後は2万人程度にまで減少していた⁽³⁾。大戦末期のアーヘンをめぐる情勢と市民生活の動向にとって、1944年9月・10月は一大画期をなしている。それはどのような意味でか、以下この点の検討から始めよう。

44年6月フランス・ノルマンディ半島に上陸した連合（英米）軍は、ドイツ占領支配下のフランス・ベルギー・オランダを解放しながら、その先遣部隊は9月始めにドイツ西部のラインラントとザールラントの国境に迫った。戦況が急迫するなかでナチス指導部は、とくにこの地方の防衛陣地構築と西部防衛線の防衛能力の整備の早急な実施を決定した。この防衛線は、対仏戦争のために1938・39年に突貫工事で建設された国境沿いの南北600キロに及ぶ防衛陣地（ジークフリート線）を主体としていたが、ブunker（コンクリートなどで建造された陣地や連絡地下道）の多くは外部が藪に覆われ、内部もほとんど錆び付き朽ち果てていた。これを短期間に改修し復旧して強固な防衛の拠点にすることは難事業であった⁽⁴⁾。これに加えて国境地域を含むラインラント・ザールラントの広い地域に、無数の対戦車障害物（壕）・塹壕・銃座など防衛陣地を短期間に構築することは想像以上の大事業だった。このための労働力として、この地方に居住する14歳から65歳までの男性と16歳から50歳までの女性、およそ20万人が強制的に動員された。そのうちの5万人はアーヘン・ケルン地区からの参加者だった。彼らの間には初めのうちこそ愛国的な熱狂があったが、

それも間もなく冷めてしまい不満が一杯になったという。その原因は、過重な長時間労働と待遇の悪さにたいする彼らの強い不満と、繰り返される空襲にたいする恐怖心だった。彼らは、作業指揮をめぐる軍部とナチス地方指導部の不統一のために、多くの犠牲と無駄働きを強いられた。さらに現場に居あわせた兵士たちが、フランス戦線での戦闘経験から対戦車障害物はほとんど無効だったことを民衆に伝えていたので、彼らはその仕事の効果自体に疑問を抱き始めた。臨時の処置だったとはいえこの労働力の強制的徴用は、最盛期を迎えていた穀物収穫の遅れの最大の原因となって農業側から批判され、あるいは労働力を引き抜かれて生産の一層の低下を招いた軍需工業側から苦情を受けるなど、既に危機的状况にはいつていた戦争経済の遂行を妨げた⁽⁵⁾。大々的かつ拙速に陣地構築が進められていた西部国境地域の人々は、「道路の至るところに対戦車バリケードを築け」というナチス党の命令に懐疑的だった。なぜなら子供達でも「米軍戦車は道路に沿って進攻してこないこと、バリケードで防備された村落は必ずあつという間に攻撃され破壊されること」をよく知っていたからである。民衆の間に混乱と動揺が広がった⁽⁶⁾。

西部国境地域の民衆は、フランス東部やベルギーの一部のように占領後帝国領土に編入された地方からの増加を続ける引揚者や⁽⁷⁾、ドイツの保護を求めて逃亡してくるフランス・オランダ・ベルギーの対独協力者を目の当たりにして、不安を強めていた。さらに問題だったのは、フランス・ベルギー戦線から退却してくる疲労困憊した兵士がもたらした影響だった。この敗走して来た兵士たちの姿と言動が、地域の民衆の不安と敗北気分を助長した。「ストラズブルクでは今やパニック状態だ。パリを占領して進撃してくる米英軍を前にして、兵士たちの洪水のような退却が続いており、その状況を正確に表現することはできない。これは1940年に仏軍が壊滅・敗走したときとほとんど同じありさまだ。一番困るのは敗走してきた兵士たちの撒き散らす噂話だ。——退却してきた兵隊たちが民衆をひどく不安にさせている。」これはストラズブルクのナチス党責任者の9月始めの報

告だが、同様の報告がケルンからナチス中央宛にも送られている⁽⁸⁾。9月初めの西部戦線の困難な状況を、宣伝省の公式報告は次のように伝えている。「フランス戦線における敗北がもたらした国防軍の政治的軍事的危機は、この戦争の過去5年間にかけて経験したことの深い深刻な影響を与えた。」⁽⁹⁾ 44年9月始めメッツからザールブリュケンに向けて避難した一婦人は、その途中で目にした光景を次のように述べている。「なんと悲しい行程だろう。疲れて秩序が全くみられない兵士の列が、行けども行けども続いている。これに交じって小さい車に荷物を一杯のせた引揚者の群。道端には焼け焦げた車両や空襲による犠牲者が次々に残されていた。避難する人々を乗せたバスのひどい混雑ぶり。なんとも表現のしようのない悲惨な光景だった。」⁽¹⁰⁾ 正確な情報から隔絶されていた普通の市民でも、ナチスドイツの敗北を感じ取っていたのである。

国境の要衝アーヘンの混乱は、前線から退却してくる敗残部隊の人と車の絶え間無い流れによるだけではなかった。西部戦線へ予備部隊と補給物資を輸送する西向きの行列が、東向きの乱流とアーヘンで衝突したため、混乱はますます強まったのである。アーヘンの軍車両基地では、部隊再編のため東行する自動車と前線に急ぐ西行の戦車部隊との間で、僅かな貯蔵燃料の配分をめぐる対立紛争が頻発した。西部国境におけるアーヘンの戦略的・心理的重要性を熟知していたナチス指導部は、この時になっても戦闘の実相を隠し民衆を欺き続けていた。9月10日午前アーヘンを視察した親衛隊帝国指導者ヒムラーは、フランケンブルクのブンカー（大型地下防空施設）の前で党・国防軍・行政当局の幹部と民衆に、「敵軍は決してアーヘンに到達できない。市民の一斉避難は全く問題にならない」と演説した。西部戦線の正確な戦況を知らされていなかった民衆は、このヒムラー演説で少し安堵したのだろうか。この地域からの民衆の自発的避難の動きがやや止まったといわれる⁽¹¹⁾ ところがその直後の9月12日、全く突然に連合軍がアーヘン地方で攻撃を開始したことを知らされ、同時に強制退去命令を受けた市民は、驚きと不安のために混乱状態に陥ってしまった⁽¹²⁾。

ホッジス将軍指揮下の米第一軍は、9月9日マーストリヒトとトリアーの間でドイツ西部防衛線にたいする攻撃を始めた。9月11日にその先遣部隊は国境線を越え、9月12日にその主力は激しい勢いでアーヘン市北部の突破を試みたが成功しなかった。市の南部で西部防衛線の一部を突破した歩兵を伴う米軍戦車隊は、初めてのドイツ領土レートゲン（モンシャウ県、国境から1～2キロ）を占領した。この時点で市の西部と南部に配備されていた防衛部隊は、訓練も装備もともに極めて不十分だった。例えばある対戦車砲部隊の場合、砲36門のうちけん引車両は僅か10台で弾薬も足りず、兵士の半分は実戦の未経験者だった⁽¹³⁾。だがその日、米軍の攻勢は一時止まった。これは死守を命ぜられたドイツ軍の抵抗のためというより、米軍の事情のためだった。進軍ペースが予定を大幅に上回ったため、武器弾薬・燃料の補給が追いつかなくなったからだという⁽¹⁴⁾。この日米軍が南部方面からさらに攻撃をつよめることが出来ていたら、アーヘンの陥落は「一ヵ月早かったろう」という見解もある⁽¹⁵⁾。この日1944年9月12日から米軍に占領された10月21日までの40日間、アーヘン市民は地獄の日々を経験させられることになった。

この混乱とパニック状態の9月12日夜、フォン・シュヴェリン中將指揮の116戦車師団は、フランス・ベルギー戦線で戦力の半分以上を失ないその補充も兵士の休養もないままに、命令によりアーヘン北部から転進先の南部に向かって市内を急ぎ通過しようとした。だがその夜は移動を断念せざるをえなかった。爆撃で破壊され尽くした町にその日退去命令を受けてパニック状態の民衆があふれ、戦車隊の通過を阻んでいたからである。荷物を載せた手押し車や乳母車をおした婦女子たちが、市の東部や北東部に通ずる道路にあふれていた。彼らは、即時退去しない命令違反者は射殺するというナチス党員の警告に脅えながら、全く無秩序に目的地も知らされず右往左往していた。この群衆のなかで部隊の行動の自由を阻まれたフォン・シュヴェリンは、部隊を一時停止し部下の士官に命じて市・警察・党のそれぞれの責任者に連絡をとらせ、このパニック状態にある民衆の整理

を依頼しようとした。彼は「責任者がすべて既に逃亡して誰ひとり発見できない」という報告を受けた後、独断で部下に命じて「夜間無秩序に避難を続けないう、一度家に帰り次の指示を待つよう」民衆を誘導させた。さらに逃亡した市政責任者にかわって彼は市民に次の指示を与えた。「アーヘン市防衛責任者の権限において次のように命令する。計画と目的を持たない住民の全面避難行動を直ちに中止し市民は市に留まること。ただし目的の宿舎・食料・輸送方法が確実な人は市からの退去を認める。フォン・シュヴェリン中将」。この指示を民衆は歓声で受け入れ翌13日の朝までに市内のパニックは一先ず収まったが、市当局・ナチス党・警察の関係者はすべて逃避していて全く無人だったので、無政府状態は避けられなかった⁽¹⁶⁾。アーヘン市民3万から4万人の運命に責任があると自覚したフォン・シュヴェリンは、13日早朝から独自の行動を開始した。彼はナチス党地区責任者フリートに電話連絡し、市民の混乱状態を沈静化させ全員の避難のために輸送手段を講じるように要請したが、「それは最早不可能だ。アーヘン市のことは貴官に任せる。幸運を祈る」と拒否された。この時点で彼は「間もないアーヘンの陥落」とそれがむしろ「市民の安全になる」と確信した。そしてたまたま残留していた電話局二人の職員に「米軍司令官あての手紙」を託したのち、部隊を市南部郊外の最前線に向かわせた。手紙の内容はおよそ次の通りであった。「私はアーヘン市民の無意味な強制撤退を停止させた。それゆえ私はこの市民の運命に重大な責任を負っている。私は貴官に要請する。貴官の軍隊によってこの町が占領された場合、この不幸な市民を人道的に扱って戴きたい。署名」。

9月13日に米軍は進撃を一時中止したため14日から戦線は膠着状態になり、16日にはアーヘン市の党・警察組織が再建された。その後米軍はアーヘンに対する包囲網を徐々に強めたのち、10月2日第二次総攻撃を開始し10月21日にアーヘンを完全に占領する。この日から戦火のなかを生き延びた民衆の占領下での生活が始まった。この間にフォン・シュヴェリンから米軍司令官宛の「手紙」は軍とナチス党上層部の手にわたり、問

題は思わぬ結果を生んだ。フォン・シュヴェリンは「反逆」容疑で軍法会議に召喚されたのである⁽¹⁷⁾。

3. 米軍包囲下の民衆生活

ベルンハルト・ポールは『アーヘンの運命：1944年秋』に、米軍の包囲下を生きた市民の日記数点と当時の軍責任者の記録類を編集している。これらは戦火にさらされながらナチス体制の最後の40日を生き抜いた民衆生活と戦況の推移を、様々な角度から生き生きと伝えている。クララ・トラフォット夫人の日記（9月12日～10月21日；以下クララ日記）とレン・ブルクグラフ夫人（9月12日～9月30日；以下レン日記）などに拠りながら、戦火の40日間の市民生活の実態を検討してみよう⁽¹⁸⁾。

9月12日：〔アーヘンに退去命令がでた。婦人と12歳までの子供は至急退避せよというのだ。病気の主人を連れて避難移動はできない。生きるも死ぬもこの地下室で過ごすほかはない。多くの人々も町に残った。敵軍が市郊外に来ているというのに、アーヘンから移動することなど出来るのだろうか。数千人を何処に移動させようというのだ。低空を飛ぶ敵機の掃射と砲撃にさらされながら、徒歩で移動しなければならない。私たちは冷静に日常通りの生活をしている。一日中ブunker（防空壕）に潜んで隠れていて、時々食事作りに家にはしるだけだ。冬に備えて沢山のビン詰をケラー（地下室）に貯えてある。一度家を離れたらケラーの貯蔵品は全て盗まれてしまうだろう。戦争ほどひどいものはないのだから。水道は止まったままだがありがたいことに天水桶は満水だし、ライナルッフ夫人から大きな桶も借りてある。〕（クララ日記）

9月13日：〔ガスは使えないが電気はまだ使える。ありがたいことに電熱器もある。ヌーデルとミルクスープを作った。ジークリンデ（娘）が昨日アルバイトディーンストから掘りたてジャガ芋2袋をもらって来た。砲声が鳴り響き爆弾で地面が揺れ続ける。昼頃敵機が超低空で飛来した。ジー

クラ－高射砲陣地は全滅した。〕（クララ日記）

〔昨日 12 日市民に全員避難命令。市ナチス指導部は特別列車が 30 分毎にでるといい、命令に従わないものは即座に射殺すると脅す。しかし他の多数と残ることにする。ベラの子供の家の 50 人の大部分はすでに避難を終えていた。多くの家族が引き返してきた。今朝になっても輸送は始まらなかった。私達のブンカーは満員だ。15 平方メートルに 20 人。党事務所に行けばパンがあると聞いて出掛けた。多数が群がっていた。獲物を取り合うヴェンデル人のようだった。一個手に入れた。道に乾パンの包みがたくさん撒かれたので拾った。他の食料貯蔵所でマーガリンや幾種類かの食料品が分配された。私達のブンカーの人々は手車一杯の食料品をもってきた。皆が何かを入手してきた。仲間 10 人で豆・飴・ココアなどを分け合った。ここでは全くの共同社会だ。一方で酷い食糧不足だというのに他方でこんなにあるなんて。牛乳工場にでかけた一人が子供のために粉ミルク 3 缶をもって来た。バター屋が一箱 50 マルクで売ってくれた。高くて言葉もなかった。仲間で分けた。午後党事務所の戸口に投げ出してあったスープ用小麦粉を手に入れた。他にも大箱が転がっていたが手に負えなかった。悲しい事ばかり起こる。〕（レン日記）

9 月 15 日：〔仲間たちでワインとシュナップスを飲んで酔った。昼頃酔っ払った婦人が家の周囲を歩き回り、誰彼なしに抱きついていて。集団のなかで婦人はたいい大ぴらだったので、男たちは彼女らに好意的だった。敵機が低空で飛んでいても皆ブンカーに入らず騒いでいた。肉屋、コーヒー屋で店じまいの売り出しがあった。皆切符なしで買った。そうでもしなかったなら略奪されてしまうところだ。昨日 15 歳の少年二人が個人の家を荒らしたという理由で即座に射殺された。なんという時代だろう。〕（レン日記）

9 月 16 日：〔昨日の朝ガルヴィッツ兵営が米軍に占領されたとか。近所のフランツェン食料品店が開いたので出掛けた。ここに留まっている 21 家族分の食料品の配給があった。みんなクリスマス前のような気分でそれ

を分けた。病気の主人に紅茶 64 グラムと蜂蜜 4 ポンドの特別割り当てがあった。隣人が来て駅にあるジャガ芋と老人施設の石炭を取りに行こうと誘ったので、娘はクロイッサンと手車を持って駅に出掛けた。私は施設に行ったが石炭は無かった。だが主人の常備薬と同じ薬を見つけたので持って帰った。私は盗みが良いことではないことをもちろん知っている。でもこれは泥棒じゃない。ドアの裏に石炭があったのでバケツに一杯すくって持ち帰った。近所の人達が籠一杯のちり紙と歯磨きを持って来たので仲間で分けた。我々はおかげで長いこと使えなかった日用品を手に入れる事が出来た。ある役所に一山のブリケット（豆炭）を見つけたが運ぶことが出来なかった。昨夜の砲撃は激しく破片が多数飛んで来て危険なので地下室ですごした。弾丸が非常に危険だったが今朝も農家に牛乳を買いに出掛けた。朝食の紅茶を飲んでいるとき、味方の激しい砲撃が始まり至近弾がたくさん降ってきたので慌てて地下室に入った。米軍の砲撃より味方の砲撃のほうがよほど危険だというのは、一体どういうことだろう。同胞を砲撃するとは恐ろしい社会だが、でも私達はなにか外のことをこんな政府に期待出来るというのか。ある者はアーヘン市の無防備都市宣言を語り、またある者は最後の一兵たりとも戦えと命令するのだ。昨夜かすかに聞こえた放送によれば、アーヘン郊外のレートゲン・ヴァールハイム・コルネリムンスタア・ブラントなどの町々はすでに米軍に占領されて、アーヘンの包囲網はほとんど完成されており、唯一の連絡路はユーリッヒ街道のみだという。包囲が間もなく完成しそのご再び平和が訪れることを祈るばかりだ。家の前の道路で娘と私は二人の兵士にあって話をした。彼らは「今や何をしても無駄だ、ドイツを破滅させることは無意味だ」と私たちに話した。〕
(クララ日記)

〔今日午後トルンプチョコレート工場は大にぎわいだった。人々は袋一杯のチョコレートを持って帰った。それを仲間で分けた。多くの店が時間をきめて品物を売って処理している。彼等は賢い、そうしなければ略奪されるだろう。昨夜から電気水道が止まった。敵機が爆撃を繰り返している。

ラジオがないので状況が全く分からない。アーヘンを決戦場面にするかどうか、ちかじか決まるだろう。私はいつも最後の場面を想定している。このブunkerにいる男たちは軍服をぬいで平服を着て一般市民としてふるまっている。なかにはもう8日続けて避難している人もいる。昨夜ヴルツェルンのブunkerを爆弾が直撃し多数の死者と負傷者がでた。〕(レン日記)

9月17日：〔夜激しい砲撃がありごく近くの家が破壊された。今やアーヘン市を巡る激戦の真っ只中にある。私達は米軍が民衆を砲火から守るために注意していることを目の当たりにしている。私達が牛乳を買っている農家ではもう数頭が砲火のため死んだ。近所の庭で私達はスモモの落果を沢山拾った。今日の昼食はスモモ入り小麦スープとリンゴジャムつきジャガ芋だった。戦闘はますます激しい。願わくば早く包囲されるように。ドイツ軍はなをユーリッヒ街道により補給を続けている。〕(クララ日記)

〔昨夜一晩中砲声が響きわたっていた。まだ休みなく続いている。でもブunkerの人々は何もないかのように過ごしている。ポン通りに行った、肉が買えると聞いて。なんという光景だろう、2、3の家が建っているだけで至る所瓦礫の山だ。この大型ブunkerの夜は全くの悲劇だ。簡易ベットに3~4人の子供がねかされており、椅子にも子供が寝ている。その回りには日用品や食べかけの食料が重ねられている。そして厩溜のように臭い。〕(レン日記)

9月18日：〔相変わらず激しい砲火。スモモを沢山収穫したが危険で少しも加工する時間が取れない。絶え間無い砲撃のもとでは何も出来ないのだ。農家の牛が皆死んで牛乳が買えなくなった。今や包囲下の生活だ。〕(クララ日記)

〔午後放送で15歳から60歳までの男子は6時までに集合するよう命令された。男たちは非常に緊張していた。朝でて行ったものはいなかった。〕(レン日記)

9月19日：〔ドイツ軍の砲撃は止んだ。ガルヴィッツ兵営は米軍の陣地で、ビスマルク塔は砲兵の観測所だという。両軍の距離は10分位しか離

れていない。私達は今や最前線にいるのだ。今朝は豆スープを食べた、一カ月前オランダ人から買っておいた 30 ポンドの豆の一部だ。〕（クララ日記）

〔トルンムプチョコレート工場の略奪は終わった。靴工場が略奪されたとき警察は一人 3 足までの持ち去りを黙認したらしい。我々のブンカーはまるで物品の交換所か売買市場のようだ。1 キロのパンを買うため長く並んだ。〕（レン日記）

9 月 20 日：〔隣人が来てカペレ通でパンが買えると教えてくれた。砲弾の飛び交うなかジークリンデは自転車で出掛け、白パンを一つ持って帰ってきた。砲弾があちこちで炸裂し家の前の瓦礫の山を吹き飛ばした。〕（クララ日記）

〔もう日付さえ忘れている。パンを買うため行列して 2 時間待った。それから何か探して町を歩いた。途中兵士が車にコニャックを積み込んでいた。私が一本所望すると兵士が言った「地下室に行ってみろ、沢山あるよ」。ワインやシュナップスを沢山見つけた。私は嬉しかった、これでいろいろな物と交換出来るから。さらに駅にジャガ芋が積まれていた。手押し車を引いた多数の人で混んでいた。いったい皆どうやってこのニュースを知ったのだろうか。ある店でバター・卵・食料品が売られていた。集まった 200 人も人は少しづつ買えた。〕（レン日記）。

9 月 22 日：〔ナチス党は再び市民に退去を命じた。私達は隠れていた。我々の町は砲撃が激しかったのでナチスと警察の見回りが来なかった。ジークリンデは 55 番の地下室に避難していたが、そこに何人もの兵士が一時退避していた。彼等は戦争に飽き飽きしておりこれ以上戦争を続けるのは狂気の沙汰だと話していた。昨日 22 日に驚くべき経験をした。一隊の兵士が来て我々の庭に迫撃砲を据え付けるために、ライナルッさんの鍵を出せと要求した。私が躊躇していると一人が怒りだして、隊長に報告すればお前は裏切り者として射殺されるぞと脅した。私は言い返した「私はすでに祖国ドイツのためにたくさんの犠牲を払っている、息子・家財産全て。

私達の最後のものまで失う気持ちは無いことをあなたは理解出来ないのか。ここはドイツなのだからと娘は私に言いながら、兵隊に鍵を渡した。26番と34番の庭に据えられた迫撃砲を一発発射すると、米軍から沢山のお返しがあった。私達は食料を地下室に急いでしまい込み、28番の地下室に避難場所を移した。しばらくすると物音がして兵士達が武器を揃えて撤退していった。隊長は私達に間もなく静かになるだろうと言った。地下室にいた別の兵士が「ロシア戦線の2年半に恐ろしいと感じたことは無かった、が今米軍の前でとても怖い」と話してくれた。敵軍はそれほど圧倒的に優勢なのだ。早く包囲網が完成しないものか。私達は既に新聞もラジオもなく世界から切り離されており、米軍のピラでだけから情勢を知る有り様だ。隣人の話によると、警察は早くジーゲルヘーエに逃げろと言ったよし。また無人の地下室はさかんに荒らされているという。私達が避難したら私達のもの全て敵の手によってでなく、仲間に盗まれてしまうだろう。】(クララ日記)

〔昨夜(21日)7時頃警官がブunkerに来て退去するよういった。もう外は暗闇だった。ベラは町に残るといってこっそり消えた。母と私は仲間とトラック10台に分乗して夜中にマリアドルフ駅に着いた。列車でユーリッヒに着きバラックで休んだ。母の外に80歳近い老婦人が5人も一緒だった。それから列車でハムに向かった。〕(レン日記)

9月24日：〔早朝危険なので55番地下室に移った。突然吠えた犬を兵士が射殺した。庭には飼い主のいない猫・兎・鶏・家鴨が動き回っている。焼き肉の材料は沢山あるのだが私には出来ない。私の足がひどく痛むので娘と医者に向かう。砲火が一休みしたとき裏庭から通りを駆け抜けて、壊れかけた家にたどり着いた。医者はお産のため往診にでかけていた。赤ん坊は無事生まれたという。長いこと待ったのち帰った。地下室に一人エッセン出身の兵士がいた。食事をしたとき彼は身の上話をした。「11人兄弟の2人は早く死んだ。3人の姉妹を除く残り6人の兄弟は全部兵士として召集された。」彼はよく躰られた若者に見えた。食事の後彼とますます親

しくなった。] (以下日記は全てクララのもの)

9月25日：[今日籠一杯の桃を収穫した。今年は桃がかって無いくらい豊作だが、取る人がいないので芝に落ちて腐っている。昨日の夜食料トラックが来た。この車がくる限り包囲は完成しておらず、我々は危険にさらされ続けているわけだ。昨夜はひどい嵐だったが、地下室ではほとんど気が付かなかった。家にいたジークリンデは窓や扉が全く閉まらず大変だったらしい。私はいま『ネルソン侯爵最後の恋』を読んでいる。]

9月28日：[スモモの収穫を二人の兵士が助けてくれた。砂糖が無いのでスモモの保存が出来ない。戦争に飽き飽きしているこの二人は、アーヘン市内にまだ多数の市民がまだ残っていて地下室で生活していると話した。道路に配備されていた兵士たちは武器をもって退却していった、ユーリッヒでまた陣地につくののだという。もう16日間私達は水道・ガス・電気・新聞のない地下室生活を続けている。あと何日続くのか全く分からない。前線の兵士と同じように我々は状況を全く知らないのだ。]

10月2日：[今朝多数の飛行機が低空飛行し爆発音がさかんに聞こえた。昨日は割合に静かだったが、夜はごく近くに激しい銃声があった。まるで窓のところで撃っているようだった。私は家に多くの食料と洋服・下着類を残したまま空けてきたので、いろいろと盗まれてしまった。]

10月3日：[昨夜は恐ろしい夜だった。ごく近くに多くの迫撃砲弾が炸裂した。28番住宅の屋根を貫ぬいた一弾が一階まで破壊してしまった。我が家の修理した窓もまた粉みじんになってしまった。これもまた味方の砲撃のためらしい。ドイツはアーヘンを第二のスターリングラートにするつもりなのだろうか。アメリカ人が救いの主に思える。とうとう我が家の二室は破壊されて地下室ともども使えなくなった。寝室と寝台は捨てても寝具はできるだけ持ち出さなくてはならない。雨が激しく降り込んできた。これが戦争というものか。]

10月4日：[今朝無数の飛行機が爆撃を繰り返している。目標はアーヘンではなくユーリッヒ方面らしい。噂によるとアーヘンへの補給路が断た

れ包囲網が完成したとか（注記；実際は10月15日）。もう何日も兵士達は暖かい食事をとっておらず、補給は飛行機に頼っているようだ。この地下室のまわりの守備陣地にいる兵士たちには嫌な奴が多い。退去命令を聞き入れず町に残っている連中は「ボルシェヴィキだ」などと非難した。彼等はおそらくバイエルン人だろう。今日の昼食は桃入り小麦粉汁スープとリンゴとキャベツだった。食後32番住宅で久しぶりに水浴した。それからケラーの我々の場所がひどく汚れていたので掃除をした。我々は7月14日から瓦礫のなかで生活している。私達は破壊されたブリコ夫人の家から持ち出してきたベット敷きを使っている。これは広いので娘と並んで休める。夜は久しぶりに良く眠った。ドイツ軍がもう反撃しないように祈るだけだ。近くの陣地で大言壮語しているあのバイエルン人のような兵士は、いざというとき一番弱虫で卑怯なものだ。アメリカ兵よりこのような「愛すべき同志」のほうがどれほど恐ろしいことか。

10月6日：〔激しい砲撃と爆撃で終日ほとんど外に出られなかった。すばらしい天気だというのに。小麦粉スープとジャガ芋の昼食をとっていると、ある人が大きい豚足肉と骨付き肉をもって来てくれた。クルッペルハイムの最後の肉屋が砲撃で破壊されたため、全ての貯蔵肉が放出されたらしい。有難いことにこれでいくらか力がつく。私達はもう10日間パンを買えないので自分でパンを焼いている。1ポンドづつ小麦粉とライ麦粉をませ時にジャガ芋澱粉を加えてパンにする。幸運にも娘は仲間と共同炊事している。野菜物（トマト・キュウリ・タマネギ）は庭にたっぷりあるし、マーマレードも十分にもっている。しかし加工貯蔵品はすべて黴びているので一度煮ないと食べられない。私達はローソクを節約するため毎夜早く寝ている。〕

10月8日：〔昨日の午後は撃ち合いが激しくひどく恐ろしかった。前の通りに数多くの砲弾が炸裂した。新しい兵士は子供のような17歳の少年達で訓練されていない。彼等はひどく酔っ払ったまま撃ち続けている。ドイツ兵は、丁度よその国でもしたように自分の国を破壊している。昨夜米

軍戦車が駅まで進出したが引き返していった。今朝も飛行機が低空を飛び回り爆弾を投下していった。相変わらず救いはなく危険が一杯だ。情勢が解決されないまま我々全員が殺されてしまう危険性が続いている。私達の耳は静かさを、神経は頼いを求めている。ドイツ兵が多くの橋を爆破した。これは終わりが近いことを意味しているのか。軍事施設が全部破壊されてからアーヘンは空になるのだろうか。]

10月9日：[今朝再び激しい撃ち合いがあった。迫撃砲・機関銃・小銃・戦車砲などあらゆる大小火器の音が鳴り続けた。その間中私達は地下室でゲームをしていた。今朝娘は危険をおかして牛乳を買いに出た。農家は危険なので残った牛を移したという。農家の牧場には兵士が伏せていた。牛乳加工場は操業をやめた。私達はいなくなった近隣の人々の貯蔵品と庭の恵みを利用して生活できる。これは全く幸運なことなのだ。全面避難命令から4週間がすぎた。あの時こうも長く救いを待たなければならないと、はたして誰が考えたであろうか。]

10月12日：[9日の午後突然一人の士官が娘たちの共同炊事場に現れ、なぜ立ち退かないのか他に何人残っているか尋ねた。そして直ちに退去するよう命じて立ち去った。ひどく驚いたが娘がうまくさばいてくれた。米軍の10日付けのピラには、24時間以内にアーヘンを明け渡さなければ市は壊滅される、と書かれていた。これは我々にとって好都合な情報だった。もうどこへ避難することもできないのだ。他所に行けば食べ物もない。今やこの場所で「生きるも死ぬも」運命に任せるほかない。昨日11日の12時、米軍はスピーカーで時間切れで攻撃を始めると予告した。猛烈な低空爆撃と砲撃が始まった。ごく近くに多数被弾した。少しでも外に出たら死ぬだろうと思われた。再びスピーカーで降伏の要求があった。米軍は我々が兵士と並んで地下室に隠れていることを知っていた。もし白旗を掲げたら我々は味方に射殺されるだろう。恐怖で体は震え心臓は破裂しそうだった。米軍は「なお町に残留している市民は友好的な人々だと承知しているから5分以内に出てくるように」と呼びかけていた。]

10月13日：〔今日スピーカーで二回の降伏呼びかけがあり、捕虜にたいする公正な取り扱いを約束していた。だがドイツ兵は全く応じなかった。ナチス党の指導の下に兵士として死ぬことは名誉だとされ、それを受け入れて戦っている無知で盲目的な兵士にとって降伏を受け入れることは出来ないのだ。昨日8番の庭に爆弾が落ちその家と周りの家は完全に破壊された。我々は相変わらず地下室でごちゃごちゃに生活している。これはもはや生活などというものではないし、終わりのない悲惨さより悲惨な終わりのほうが余程のぞましいと思う。〕

10月14日：〔今朝また降伏の呼びかけがあった。米軍はそれが無駄な努力であることが分からないらしい。私は今日掃除と少しだが洗濯もした。娘はわが家の壊れた窓を修理した。屋根には大穴が空いたままだ。修理を手伝ってくれる人がいないのだ。また壊されるものを修理するのは無意味かもしれない。〕

10月15日：〔また降伏の呼びかけ。屋根の雨漏りを少しは防ぐために、明日早朝修理を手伝ってくれると隣人が約束してくれた。だが夜屋根が壊れたままなのに雨になった。〕

10月21日：〔5日間全く書く事が出来なかった。事件が次々におこったので何から書き始めたらよいのか。16日月曜の朝隣のクレマーさんが娘と屋根を応急修理してくれた。食後の洗い物をしていると、激しい銃声と娘の叫び声が聞こえた。「ママ早く来て、二人が白旗を掲げて道にいるわ。」「注意しなさい」と私が言ったとき娘が飛び込んで来てまた叫んだ。「アメリカ兵が来るわ、白旗を取ってくる。」米兵の一隊が注意深く銃を構えながら一軒一軒調べている姿がみえた。私はおもいきって英語でよびかけた。「進んでください。兵隊もだれもいません。年寄りと女だけです。」兵士は私達に病院に行くようにと言った。大切な荷物をまとめ白旗とパンをもってヴィンセンツ病院に行った。そこで私は臨時通訳として使われた。たっぷり一時間待たされた後、証明書もらい二人の米兵に付き添われてガルヴィッツ兵営にいった。病気の夫は自動車で運ばれた。それから雨の

中を歩いて森を抜け、途中からトラックに乗せられてブラントの兵営に行った。そこで仲間たちと一緒に大きい部屋に収容された。初めての夜、私達はひどく汚い兵営の細長い棚ベッドに、腰掛けたり横になったりして休んだ。寒い夜で毛布もなく自分のオーバーだけをかけて寝た。強制退去を避けた私達はいま相手の手に落ちたのだ。]

4. アーヘンにおける占領行政＝軍政の開始

米軍のアーヘン地域にたいする地上攻撃は、第一期9月2日から26日、第二期10月2日から10月21日、第三期11月16日から11月30日に分けられる。その第一・第二期の初期はアーヘン南部西部での、次いで北部北東部での激戦を繰返したのち、米軍は10月15日アーヘンの包囲を完成した。10月16日には市の中心に近い地下道に潜んでいた多数の市民が米軍に投降し保護されている。彼らは市郊外のルッツォウ兵営などに収容され、11月7日に釈放されるまで米軍の拘束のもとにおかれた⁽²⁰⁾ 米軍は市内に残って抵抗をする246師団の敗残兵を街区ごとに排除し、21日に全市の占領を終了した。このアーヘン占領の日から1945年3月6日にドイツ西部の中心都市ケルンを占領するまでの約5カ月の間連合軍の進撃は、ドイツ軍のアルデンヌ反撃など最後の激しい防戦によって遅々としていた。事実連合軍は1945年2月末までに、国境から30～40キロのルーア川の線まで進出できたのみであり、その占領地域面積はおよそ900平方キロ、残留していた民衆は約6万人に止まっていた⁽²¹⁾。この時点で連合軍が占領した都市らしい都市はアーヘンのみだったから、アーヘンで始まる米軍の占領行政は、「外に対する広告塔、内に対する実験場」として重要な意義をもっていた。戦前約16万人の人口は戦火の過程で激減し、建物・住宅も空襲につぐ市街戦によってその85パーセントが壊滅されて、市街地は瓦礫の山にかわっていた。市内に50あまりあった学校・教育施設のうち、どうにか修理して使えたものは12に過ぎなかったことから、その物的

被害の大きさがわかる⁽²²⁾。市民生活維持のための施設の多くが破壊されていた。水道施設では中央給水ポンプ所がほぼ無傷で残っていたので、市内の三分の一への配水は間もなく復旧したという。だがその他の下水道・電気・ガスなどのインフラの応急修理を終えて、「アーヘンが蘇った」のは年末だった⁽²³⁾。

占領直後旧ナチス時代の各種行政機能は全く停止していた。ナチス党責任者（クライスライター）や市長とともに、多くの市・公的機関の職員は逃亡しており、米軍の職場復帰命令に直ちに応じた職員は十人程度に過ぎなかった。10月21日の占領と同時に、軍政担当要員の分遣隊 F1G2（構成は将校25名兵士50名）が進駐し、占領行政（軍政）を試行錯誤のうちに開始した⁽²⁴⁾。

占領地域における軍政の緊急課題の第一は、激戦を続けている前線の連合軍の安全と補給物資の輸送路確保だった。そのためには前線のすぐ背後の占領地域に残っていた数千人の市民を、一先ず旧兵舎に強制拘留するとともに、潜伏したナチス党員の逮捕を開始したが、彼らが退却していたため成果はほとんどなかった。この課題は軍政部より軍直属の諜報部（＝CIC）と軍警察（＝MP）の仕事だった。前述のアイゼンハウアー布告第一号とその根拠となった〔CCS551, JCS1067〕に示されたように、ナチス党員とくにその有力分子と秘密警察（SS）メンバーの発見・拘束は、軍政実施の前提だった⁽²⁵⁾。このために占領地域において、①夜間外出の禁止、②居住地域以外への旅行の禁止、③米兵と住民との交際・接触の禁止、が厳しく実施された。

その第二は、軍政当局の指揮監督のもとに消滅した市の行政機構を占領目的にしたがって再建し、民衆の生活を出来るだけ速やかに再び軌道に乗せることだった。このために軍政当局は、まず適当な地元のドイツ人から市政担当者を見いだしなければならなかった。彼等は地域のカトリック教会組織の協力を取り付け、その筋で市長候補を探した。「カトリック教会をナチスにたいする抵抗組織とみなすことはできないにせよ、反対勢力の

重要な要素であり彼等の情報は極めて貴重だ。神父たちは十分に協力的な情報源だ」⁽²⁶⁾。軍政当局は、占領開始より早い時期からアーヘン司教ファン・デア・フェルデの協力をえて、司教の友人で非ナチス的で旧中央党系の弁護士フランツ・オッペンホッフを市長に推挙した。彼はナチスの報復、とくに南ドイツに疎開していた彼の家族に対するテロを懸念したが、結局引き受け11月1日から市長となった⁽²⁷⁾。こうして彼の下に再び集められた旧市職員による軍政下の「アーヘン市政」が再生した。占領直後に旧兵営などの臨時収容所に抑留されていた市民は、戦線の安定化と海外「世論」の批判およびナチスによる逆宣伝などに米軍側が配慮した結果、11月半ばまでに解放され瓦礫のなかで生活を再開した。この釈放の前提として、軍政当局の管轄下ではあれドイツ人による「市政」の再建が重要な意味をもった。占領直後の再生市政の任務は、先ず市民の不満を抑え生活を再建することだった。そのためにも、仮住居を確保し道路の瓦礫を除去して利用可能にするなど基礎的生活条件を整え、民衆に食糧を安定的に供給し疾病を予防しなければならなかった。

11月から市政はまず最初にパンと主要食糧の配給制度を復活したが、その具体的方法は、ナチス時代の戦時統制経済下の制度と全く変わらなかった。また市民は改めて住民登録を義務づけられた。これは食糧切符の配布、住宅事情の調査、戦災市街地や道路整理のための労働力調達、さらにはナチス関係者の発見など、市民の実態把握のための基本的調査であった。アーヘン市占領開始時点の食糧事情について、ヘンケは次のように述べている。「占領直後市内に残留していた一万人強の民衆は、個別的に多少の備蓄食糧を持っており、飢えることはなかった。パンと肉を扱う約50の商店が既に営業を再開していたし、馬鈴薯と子供用のミルクは十分にあった。住民は毎週半ポンドの肉を切符で買え、野菜は自由販売だった。医薬品も十分にあり、30人あまりの医者が医療に従事していた」。44年11月中旬モンシャウ（アーヘン市の南約20キロ）の軍政部長（G1H2）の呼びかけで、周辺5町の代表者による会議が開かれた。共通問題は食料問題だっ

た。そこでは、レートゲンには若干の穀物備蓄もあり製粉所の操業も可能なので、当分パン用粉の供給について心配はないが、だが馬鈴薯については極めて深刻で、一月からの供給は予想できないとされた。5町にアーヘンを加えて食料と消費物資を相互に融通しあえる「食料プール」構想が提案された。厳しい旅行禁止措置のために、人と共に物の交流が止まっていることが問題だと結論もでた⁽²⁸⁾。

アーヘンを含む占領地域において、この時期に食料問題が深刻になっていなかったのは、44年夏まで食料配給制度が機能していたためだが、旧市と食料部局がアーヘン市包囲前に配給用貯蔵食糧を市民に放出したためである。占領直後には人口が配給予定人口の数分の一に激減していたため、残った配給用食料による需給操作が比較的容易になったためでもある。さらに激しい戦火と一時的にせよみられた略奪行為にもかかわらず、膨大な軍用備蓄食糧がアーヘンとその周辺に残っており、これを住民用に転用できたためだった。地域的に限定されていたとはいえ、アーヘン周辺に「平和」が回復するとともに避難先から帰る市民が急増した。このため彼らの必要とする配給用食糧需要が増加する一方であった反面、45年春までライン川を挟んで両軍の激戦が続いていたので、市への食糧品の移入・供給はほとんど途絶えてしまう。そのため食糧備蓄は間もなく底をつくことになった。3月にライン西岸の戦火が止み、5月に戦争が終わっても、食糧事情は改善されるどころか悪化するばかりだった。農村部への「買い出し」もままならなかった。住民は軍政府の公式報告にいう「一日1200カロリーの飢餓水準」の日々を余儀なくされた。これには特別な事情もあった。

アーヘンからライン河にかけての農村地帯（ケルンアーヘナーフト）は主戦場となり、1944年秋から45年春まで半年近く激しい戦闘が続いたため、多くの農家が破壊され農地も弾痕や不発弾と地雷で荒廃してしまっていたからだった⁽²⁹⁾。加えて新しい占領地域の市も町も「自分」たち地域のことと手一杯であり、「食料プール」構想を実施して食料の「有無相通ずる関係」を組織できなかった。仮に一部地域に余剰があっても、鉄道も道路

も水路もその多くが破壊されていたため、重量貨物の輸送がほとんど不可能な状態だった。米軍政当局も占領初期の一時的局地的な食料不足にたいしては、地域レベル判断により緊急に食料供給を実施した。例えば 44 年 11 月後半だけでも軍事行動上の必要性を根拠に、ベルギー・オランダ・ドイツの貯蔵基地から約 1500 トン食料を供給している。しかし食糧援助の対象地域が広がった場合、現地の判断と備蓄だけでは処理できなかった。本国政府と総司令部レベルでは、政治的にみてモーゲンソー計画の底流がなお残っていて、占領地援助には懐疑的であった。連合国からは、占領下のドイツ人よりドイツ占領から開放された諸国（ベルギー・オランダ・ギリシャなど）の民衆のほうが「飢えている」と非難された。ナチス戦時経済体制の一環として創設された食料切符制度は、占領過程においても 1945 年 5 月以後の連合軍による分割占領と本格的占領行政期においても、基本的には継承された。これが事実上廃止され食料需給の自由化が始まるのは、1948 年初夏の通貨改革ののちであった。

食料問題とともに場所によってはより深刻な問題は住宅問題だった。アーヘンとその周辺では、空襲とそれにも増して激しい地上戦闘のために、多くの住宅が失われた。こわれた住宅を修理しようにも資材も職人もいなかった。自分で修理できる程度は限られていた。アーヘンだけで 85 パーセントの住宅が破壊されていたので、民衆は戦火が止んでも住む家がなく、家の地下室（ケラー）、大型の地下防空施設（ブunker・ルフッシュケラー）、砲台陣地（ホッホブunker、ブunker）や地下坑道（ストーレン）などに住み続けなければならないことが多かった。米軍は戦災を免れた住宅の多くを米兵宿舎として強制的に接收した。米軍を主体に連合軍 20 万人以上が、この地域に集中して雨の多い寒い冬を迎えていたのである。連合軍にとって兵士と軍関係者の住居の確保が緊急課題であった。民衆の住宅事情は、占領と共にむしろ一層深刻になった。アーヘンの事情は不明だが米軍が初めて占領したレートゲンでは、居住可能な住宅 353 のうち 290 が米軍に収用された。そのために町の住民約 2000 人は 60 余り住宅に住むことを

余儀なくされ、小さい家に8家族がすむことも珍しくなかったという⁽³⁰⁾。

アーヘンの軍政は、連合軍がドイツ軍と激戦を重ねている時期に展開された。したがって軍政にあたっては、しばしば「軍事」が「政治＝民政」より重視されまた拙速に進められた。軍政はアメリカにとって事実上初めての経験であったから内外から注目されており、その分「軍政」に対する批判・非難も多かった。それはまず人事面に集中した。軍政当局の監督下の「市政」に復帰したドイツ人幹部職員の大半が旧ナチス党員であったことが、連合軍の「非ナチ化」の大原則に反していると批判されたのである。さらに市長オッペンホッフの人选がカトリック保守派に偏っているとの批判もあった。現地の軍政幹部は、市行政の専門家として採用したドイツ人旧職員がいなければ、軍政の円滑な実施は困難であることがわかっていただけに、問題は複雑であった。市長オッペンホッフの「非ナチス性」についても疑問視され始めたが、彼が1945年3月25日ナチスの青年テログループ（狼）のK. グーテンベルガーに暗殺されて、事実が不明のまま終わった⁽³¹⁾。

「アーヘン市政」が軍政下に個別の実験的に始められたために、ワイマール時代にもナチス時代にも存在した、「ライヒとラントとゲマインデ」とか「プロシャとライン地方」などという、ドイツ近代史に特有な関係が、一切なくなったことに注目する必要がある。さらに地方行政の基本単位としての市・町（ゲマインデ）が占領直後の軍政によって再建され、それが水平的地域的に広がって地方的な行政・経済組織に発展した過程は、戦後の四か国によるドイツ分割占領と軍政の展開と民衆生活の關係に、強い影響をあたえることになる。この点の検討は別の課題である。

《注》

(1) この布告の前文は以下のとおりである。

[軍政府——ドイツ
総司令官の管轄地域]

布告 第一号　ドイツ民衆へ

私、連合軍派遣軍総司令官ドワイト・アイゼンハワーは以下のように声明する。

1. 私の指揮下にある連合軍は今ドイツ本土に入った。我々は勝利者として来たが抑圧者としてではない。我が連合軍によって占領されたドイツ領土において、我々はナチズムとドイツ軍国主義を壊滅する。我々はナチス支配体制を打倒しナチス党を解体し、この党が創設した残忍で抑圧的で人種差別的な法律と制度を全て廃止する。我々はしばしば世界平和を破壊したドイツ軍国主義を根絶する。軍と党の指導者、ゲシュタポおよび犯罪や残忍な行為を行った疑いのあるものたちを裁判にかけ、もし有罪の場合はそれぞれに応じて処罰する。
2. 占領地域内の立法・司法・行政の三権とその運用の権限は、連合軍最高司令官及び軍政責任者としての私に帰属する。これらの権限を実行するために、私の指揮のもとに軍政府が創設される。占領地域の全ての人々は、軍政府のあらゆる命令・布告にたいし即時無条件に従わなければならない。違反者を処罰するために軍政府裁判所が設置される。連合軍に対する抵抗は容赦なく鎮圧される。その他の重大な違反はもっとも厳しく処罰される。
3. 占領地域内の全てのドイツの裁判所と教育機関は閉鎖される。国民（フォルクス）裁判所・特別裁判所・秘密警察と特殊な法廷における裁判権は剥奪される。刑法と私法関係の裁判所と教育機関は、諸条件が許す時に再び許可される。
4. 全ての公務員は次の指示があるまで現職に留まる事と、連合軍あるいは連合軍が公布したドイツ人あるいはドイツ政府に対する命令及び布告に対して服従し実行する事を義務づけられる。この義務は公的企業や重要な経営に勤務する総ての職員・労働者と社会的に必要な仕事に従事する人にも適用される。

ドワイト・ディ・アイゼンハワー

連合軍派遣軍総司令官

アメリカ軍政府法令集 1946年6月1日 Proklamation Nr. 1 の全訳。なおこの布告には日付がない。Henke/Oldenhage: Office of M. G. for Germany (US), ワイツ 94: 5-15。英米両国は1943年からチャーチル・ルーズベルト直属の共同委員会 (Combined Chiefs of Staff=CCS) で占領政策について検討を重ねていた。その委員会は1944年4月に対独占領方針を [CCS 551号] として布告した。その中で [占領行政は厳格に実施するが、同時に軍事的に許される範囲内で市民にたいし公正で人道的でなければならない。占領地域の民衆に示すべき基本点は、1) 軍事作戦の支援、2) ナチズムとナチス

体制の解体, 3) 法と秩序の維持, 4) 可能な限り早く正常な市民生活の回復, とした。この布告は1944年9月に米国を主体とした委員会 (Joint Chiefs of Staff=JCS) 1067号として修正公布された。これに従ってアイゼンハウアーの布告が出されたと考えられる。しかし英国側は一貫して551号を支持し1067号を認めなかった。占領政策決定過程におけるこの矛盾は、本格的占領期になってむしろ深まり、ポツダム会議でも解決出来なかった。メリット 95: 49-69。ヘンケ 95: 93-122。クレスマン 91: 37-65, 352-353。[なおクレスマンには優れた翻訳がある。石田勇二/木戸衛一訳『戦後ドイツ史 1945-1955』19-40頁]。ケッテナッカ 89: 238-269。クリーガー 88: 28-53。クリーガー 91: 79-104。

- (2) 戦後50年以上を経過した現在でも、大戦中の市民生活の記録や個人レヴェルのオーラルヒストリは数多く出版されている。本格的な研究書・史料は多数あるが、その中ではヘンケ(1995)が基本的である。
- (3) アーヘンの人口は、1939年5月17日現在16万1624人、1950年9月13日現在12万9811人。1939年現在アーヘンはラインラント・ザールラントではケルン77.2万人、クレーフルト17.1万人に次ぐ第3の都市であった。Statistisches Jahrbuch für die B. R. D. 1952, 21。テント 82: 41。
- (4) ドイツとフランス国境の南北約600キロメートルに及んだ西部防衛線(Westwall)の主要部分をなす旧ジークフリート線(Siegfried)の戦術的意義はすでに疑問視されていた。「この防衛線は進攻してくる優勢な敵にたいしほとんど無意味な存在だ。それはマジノ線が1940年のドイツ軍の進攻に無力だったように」。設備の腐朽は、錆びた扉が開かず電信電話の設備や水も使えないとか、あれこれとひどい状態だったという。ヘンケ 1995: 125。
- (5) 繊維産業業界最大手の合同人造繊維会社(アーヘン北15キロ、ハインスベルク工場)では労働者の半分が徴用された。ヘンケ 95: 143。
- (6) ヘンケ 95: 125-127。ケルン・アーヘン地方からこの陣地工事のために5万人が強制徴用された。ガウライター(ナチス党地方責任者)グローエとその部下は、ラインラント防衛の国防軍(第七軍)から防衛施設の構造とその配置について、しばしば文句をつけられている。徴用された若者(その大半はヒトラーユース)の親たちは、仕事のやらせ方が「ヴォルシェヴィキ的」だと非難したという。
- (7) ヒルゲマン 84: 130-131。[Luxemburg, Elsass, Lothringen, Eupen-Malmédy-Moresnet (ベルギー領土の一部)]
- (8) 1944年9月8日ストラスブルク・ガウライターの報告。ヘンケ 95: 124。
- (9) 同年9月4日宣伝省の業務報告。ヘンケ 95: 122。

- (10) Len Burggraf, Tagebuch vom 12. bis 30. September 1944. ポール 61 : 152-163。レン・ブルクグラフはメッツを退去し、知人ベラを頼って一時的にアーヘンに滞在した。クララ・トラフォートのようにアーヘンに生活の基礎を持っていなかった彼女は、9月21日の退去命令に従って母親とともにハム（ウェストファーレン）に避難した。レン日記は彼女のアーヘン滞在中の部分を利用した。
- (11) ポール 61 : 145-146。民衆は至るところでニュースから切り離されていた。「ニュース不足は極端だった。人々は近くで何が起きているのか知らなかった。まして遠くでのニュースなど全く知らなかった」（テオドル・ホイスの回想、45年春・ハイデルベルク）。エッシェンブルク 83 : 61。
- (12) アーヘン地区防衛司令官オスタァロートの記録。「9月11日ミュンスターの方面軍総司令部からアーヘン市民の全面避難疎開命令を受けた。ナチス党市指導部はこれを夜になって知った。そのために30本の特別列車が必要になるがクライスライターはそれは可能だといった。翌12日彼と警察署長の3人で協議した結果、この戦況のもとでも市民の避難を実施することを決めた。9月13日クライスライターはアーヘンのガウライターから避難実施の許可を受けた。」オスタァロートはこの時の緊急避難行動は成功したと述べているが実際は疑わしい。[Oberst H. von Osterroht, Tätigkeitsbericht über die Zeit meiner Verwendung als Kampfkommandant von Aachen im September 1944 ポール 61 : 44-58.]。レン・ブルクグラフの日記 ポール 61 : 153-154。

なお、9月11日アーヘン市のほか周辺五県にも同様の命令が出された。それはケルン・アーヘン地方（ガウ）で25万人を早急に、モーゼル地方（ガウ）では10・11月中に強制避難させる予定だった。アーヘンのように緊急事態でなくやや時間的にゆとりのあった場合、命令はより強引に実行された。例えば9月17日ホエンゲンではケルンからガウライター直属の特別部隊約130人が動員され、次の週には、ベルリンからの増援も含めた500人がこの地域の民衆を「狩りたてた」。しかし民衆の「不服従」が権力に対する嫌悪感を育てていった。特に農民の残留が目立ったという。ヘンケ 95 : 136-141。

- (13) オスタァロートの記録、ポール 61 : 50-52。
- (14) 連合軍の弱点は燃料弾薬類の補給問題だった。44年6月の上陸作戦から11月末まで利用しうる大型港湾はルアーブルだけであったし、さらに北フランスの鉄道と道路は徹底的に破壊されていたので、進撃のスピードに補給が追いつけなかった。ヘンケ 95 : 149。

(15) オスタァロートの見解。[米軍戦車隊が13日にアーヘン南部戦線で攻勢を続行していたとしたら、防衛線には取り返しのつかない「穴」が開きアーヘンもほとんど占領されていた。それはドイツ軍陣地の整備が遅れていたうえ、鉄条網と地雷配備が不十分であり、さらに戦車・大砲が補充されていなかったためだ。米軍が補給不足で攻撃を一時停止したのでドイツ軍は時を稼ぐことができた。] ポール 61:63。

(16) フォン・シュヴェリンは戦後その時の気持ちを次のように回想している。「ここは我々の故国なのだろうか。戦争の女神が復讐しているように見えた。我々の多くが戦闘・占領さらには退却の過程で、何回となくこのような混乱を経験したのではなかったか。フランス・ポーランド・ロシア・イタリアで十分なものでなかったにせよ同情心をもって、逃げまどう幾百万の民衆の悲劇を目の当たりにして来たのではなかったか。その都度その悲惨さが我々の故国で起こったことではないことを、神に感謝したのではなかったか。われわれは故国における空襲の恐るべき被害について知ってはいた。しかしそれは限られた都市か地域の事だと思っていた。我々は知らないだろうか。戦場において道路上の避難民の群れは非常に危険に曝されていることを。避難民は戦場を走り回る敵軍の戦車や車両から決して逃れることができないことを。射撃されひき殺される危険にいつも曝されることを。116 戦車師団の司令官は、理性のある兵士なら当然なすべき処置をとる決意をした。兵士たちに故国のこの悲惨な光景を見せずに済ますためにも、いかなる場合であれこのパニック状態を終結させなければならないと。」ポール 61: 65-66。

この手記は1945/46年に書かれているが、その内容は44年初冬の軍法会議に提出された彼自身の当時の記述と一致しており、さらにポールの編集したほかの日記・記録類とも十分整合性がある。ドイツ国防軍にも「ヒューマン」な将校がいたことを示す記録としても史料的意義がある。彼は1957年11月、アーヘン市から「困難な時期に市民を戦火から守った」との理由で顕賞されている。[General der Panzertruppe a. D. Gerh. Graf von Schwerin: Die 116. Panzer-Division von der Seine bis Aachen, ポール 61: 59-97]

(17) フォン・シュヴェリンは、9月13日電報局員に託した米軍司令官宛の親書の件（占領後残留市民を公正かつ人道的に取り扱うように要請した内容）と強制退去の総統命令無視の件により、116 戦車師団長を罷免され軍法会議にかけられた。ケルンのガウライター、グローエは彼の行為は叛逆罪だと強く主張したが、彼を知る他地域のガウライターの中立的態度と国防軍側の全面的擁護（アーヘンの処置の緊急性と市民の支援、親書は敵に渡っていない

こと、歴戦の将軍としての輝かしい経歴など）もあって、軍法会議は12月9日彼を警告処分とした。注16と同じ。

- (18) ポール1961. Clara Trafford, Tagebuchbrief vom 12. September bis 21. Oktober 1944, ポール61:192-213。クララ・トラフォートは1898年生れ。病気の夫（エドアルト）、娘（ジークリンデ）と3人で、市南部郊外の自宅（ハーン通り32番）と隣家の同28番の地下室に住んで、戦火の40日を生きのびた。この日記体の手紙はすでに疎開している友人宛に書き続けられたが、結局送られなかったらしい。ポール61:192注。なおLen Burggrafについては(10)。
- (19) この部隊はバイエルン編成の第七軍に属する246歩兵師団（die 246. Volksgrenadier-Division）であった。この師団は、同年9月2日ブラハ郊外で東部戦線の敗残部隊を主体に再編成された。師団編成は当時の国防軍の弱点を良く示している。まず士官と下士官の半分が戦闘未経験者と空軍・海軍からの転用者であった。兵士でも同様の転用者と全くの新兵が三分の一だった。対戦車砲や車両が少なく装備が非常に劣っていた。しかもろくな訓練もなしに9月27日にアーヘン郊外に配備された。[当時の師団長ヴィルクの回想: Oberst a. D. Gerh. Wilck, Die 246. Volksgrenadier-Division in der Zeit von September bis November 1944, ポール62:97-139]
- (20) ポール61:183-187。[Luise Herné, Rund um St. Adalbert während der Belagerung Aachens, ポール61:174-187。]
- (21) ヘンケ95:158-159。アーヘンを放棄したドイツ軍はマース川の支流ルーア（Rur）川に防衛線を敷き、「最後の抵抗」を45年2月まで続けた。45年2月22日にユーリッヒ（Julich）が、同25日にデュレン（Düren）が占領されて、西部戦線のドイツ軍の敗北は決定的となった。
- (22) テント82:41。
- (23) ヘンケ95:267。ヘンケは包囲下を生き延びた市民数を「約6000人」とみている。
- (24) テント82:41-41。ビルスタイン95:15-19。軍政担当要員は、1943年夏頃からイギリスで、大陸反攻後はフランスで、特別の訓練をうけた。その数は米軍だけで一万数千人に及んだという。クリーガー88:68-72。ヘンケ95:93-120。
- (25) 注(1) 後半参照。
- (26) ヘンケ95:264。米軍政当局ははじめ協力者を、「反ナチス抵抗グループ」と「ワイマール期の政治家・組合運動家で非ナチ分子」のなかに求めた。その対象者は少なかったし仮に適当な人がいても、まだこの時期には手をあげ

ない場合が多かった。聖職者は民衆とともに残っていたから、軍政当局者が当たり易かった。

- (27) ナチス SS の秘密テロ組織 [das Schwarze Korps] は、連合軍に対する協力者は裏切り者としてその家族も含めて殺害するとたびたび声明していたから、協力するにはそれなりの信念や覚悟が必要だった。ヘンケ 95 : 264-266。3 月上旬ケルン陥落直後に米軍政当局からケルン市長への復活を要請されたアデナウアーも、兵役にいた三人の息子の安全を強く懸念して躊躇し拒否している。
- (28) ヘンケ 95 : 175。
- (29) 筆者が 1972 年、76 年にアーヘンからルーア川をへてベルクハイムの農村地帯を歩いた時、田舎道の交差点や、やや小高いところに廃墟となったまま残る bunker をよく見かけた。話を聞いた農民たちは、戦後 2~3 年農地は荒れていたし、戦後 4~5 年間まともな建物はなかったと話していた。1996 年には bunker の廃墟はもうほとんど見当らなかった。
- (30) ヘンケ 95 : 178-179。
- (31) アーヘン市長 オッペンホッフ 選出の経緯と彼のカトリック保守派の立場の問題性、市政幹部のナチスの経歴に対する批判などについては、ヘンケ 95 : 271-295 に詳しい。

文 献

- R. Billstein/E. Illner: You are now in Cologne, 1995
Chronik Verl.: Chronik 1945, 1994
Droste Verl.: Chronik deutscher Zeitgeschichte. Das Dritte Reich 1939-1945, 1983
Ders.: Chronik deutscher Zeitgeschichte. Das besetzte Deutschland 1945-1947, 1986
T. Eschenburg: Geschichte der Bundesrepublik Deutschland Bd.1 Jahre der Besatzung 1945-1949, 1983
K-D. Henke: Die amerikanische Besetzung Deutschlands, 1995
W. Hilgemann: Atlas zur deutschen Zeitgeschichte, 1984
Institut f. Zeitgeschichte (Hg.): Inventar archivalischer Quellen des NS-Staates Bd. 3/1, 1991
L. Kettenacker: Krieg zur Friedenssicherung, 1989.
C. Klessmann: Die doppelte Staatsgründung. Deutsche Geschichte 1945-1955, 1991

- W. Krieger: General Lucius D. Clay und die amerikanische Deutschlandpolitik 1945–1949, 1988
- Ders.: Die Deutschlandpolitik der amerikanischen Besatzungsmacht 1943–1949, (in) W.-U. Friedrich (Hg.): Die USA und die Deutsche Frage 1945–1990, 1991
- R. L. Merritt: Democracy Imposed. U.S. Occupation Policy and the German Public, 1945–1949, 1995
- R-D. Mueller: Kriegsende 1945, Die Zerstörung des Deutschen Reiches 1995
- B. Poll (Hg.): Das Schicksal Aachens im Herbst 1944, (in) Zeitschrift des Aachener Geschichtsvereins 73. Bd. Jg. 1961, 33–254
- J. F. Tent: Mission on the Rhine, 1982
- H.-U. Thamer: Verführung und Gewalt Deutschland 1933–1945, 1986
- C. Weisz (Hg.): OMGUS Handbuch. Die amerikanische Militärregierung in Deutschland 1945–1949, 1994
- C. Zentner/F. Bedürftig: Das grosse Lexikon des Dritten Reiches, 1985
Autorisierter Nachdruck des Amtsblattes der Militärregierung in Deutschland Amerikanische Zone (1946): Gesetzliche Vorschriften der amerikanischen Militärregierung in Deutschland